

Title	W・ W・ ロストウ著 『共産中國の見通し』
Sub Title	W.W. Rostow : The prospects for communist China
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1955
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.28, No.7 (1955. 7) ,p.44- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19550715-0044">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19550715-0044</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 紹介と批評

W. W. Rostow :

## The Prospects for Communist China

1954. pp. 379. published jointly by The  
Technology Press of Massachusetts Institute  
of Technology and John Wiley & Sons, Inc.,  
New York.

W. W. ロストウ著

## 『共産中國の見通し』

—

本書は、マサチューセッツ工科大学の経済史の教授であり同時に同大國際問題研究所の中國研究主任であるロストウ教授が、リチャード・W・ハッチ、フランク・A・キアーマン・ジュニア、アレクサンダー・エクスタイン及び前記國際問題研究所の多數の専門學者の協力をえてまとめられた勞作である。本書は、著者自身が序文のべているように、「北京政府の意圖とそれをなすとげる能力とについて統一的な判断を提供することによって、將來のアメリカの

政策の立案に援助をする」ことを主要な目的としたものであつて、とくに「(一)中國共産主義政權をうごかしているものは何か (二)中國社會及び外部の世界について中共政權は現在どのような意圖をもっているか (三)その目的をなすとげるにあたつて中共政權はどのような問題に當面しているか (四)その明白な目的からみて中國共産黨の成功または失敗についてどのような見込があるか (五)豫測しうる將來において中國共産主義社會にはどのような變化の見通しがあるか」という五つの問題に答えようとしたものである。いいかえれば本書は、中華人民共和國の實態の総合的な分析とその將來に對する豫測とをうづじて、アジア政策の確立というアメリカの當面する現實的課題の解決に重要な手がかりをあたえようとしたものにはかならないのである。したがつて本書のとり扱う範圍も極めて廣汎で、歴史・社會・政治・外交・經濟の各分野でその將來について積極的な結論をみちびきたすことに努めている。

周知のようにアメリカにおける中國研究、とくに中國共産黨にかんする研究は、ここ數年來著しい發展を示している。それは、一つには、第二次大戦以後國際政治の指導的地位にたつたアメリカが中國における共産主義勢力の進出に對して有效な對中國政策を樹立しなければならぬという現實的な要請にもとづくものであるが、ともかくその研究の成果にみるべきものがあることは否定しえない事實である。このことは本書の卷末につけられている文獻目録を一見すれば明らかであるが、なかでも Benjamin I. Schwartz, Chinese Communism and the Rise of Mao, 1951. U. P.

Fitzgerald, *Revolution in China*, 1951. Conrad Brandt, Benjamin Schwartz and John K. Fairbank, *A Documentary History of Chinese Communism*, 1952. Robert G. North, *Kuomintang and Chinese Communist Elites*, 1952. H. Arthur Steiner, *Chinese Communism in Action*, 1953. Robert G. North, *Moscow and Chinese Communists*, 1953. S. B. Thomas, *Government and Administration in Communist China*, 1953.——などはわが國におつても高く評價を  
れなければならぬものであらう。本書は、このような過去における  
中共研究の成果を基礎としてまとめられたものであつて、一應ア  
メリカにおける中共研究の現在の水準を示すものといつても過言で  
はないように思われる。この意味において、本書のもつ價値は十分  
に認められなければならない。

本書の構成は、六部（十七章）に分れている。いまその項目を示  
すと次のごとくである。

第一部 共產黨勝利への序曲——權力への闘争（一八四〇—一九  
四九年）

第二部 共產黨の政策の發展（一九四九—一九五四年）

第三部 中共政權とその支配する人民

第四部 中ソ關係

第五部 共產黨權力と中國經濟

第六部 共產中國の見通し

以上の各項目のうち、第五部のみについては、すでに石川滋氏が  
「アジア研究」第一卷第三號において紹介の勞をとられている。し

## 紹介と批評

たがつて筆者は、第五部を除く他の部分について、順次その内容を  
紹介することとしたい。

## 二

著者は、「中共政權の地位、それが當面している諸問題及びその  
繼續的支配への見通しは……革命の歴史にてらしてみればはじめて理  
解することができる」という立場から、第一部において、一九四九  
年中國共產黨がその支配を確立するに至るまでの歴史的過程の分析  
を行つてゐる。

著者はまず、清末における西歐勢力の侵入が中國を屈辱的な地位  
において近代的國際關係の一環にくみいれ、中國社會の變革への契  
機をつくり出したことを指摘しつつ、それが中國の内部的危機の發  
展と清朝の政治的無能力と相俟つて、政治的知識階級に中國が解決  
しなければならぬ基本的課題として、(一) 中國政府の民主的改革  
（一九一一年以後は強力な統一國家の形成の課題に變化した）(二) 中  
國の民族的獨立 (三) 中國社會の近代的方向における再形成——とい  
う三つの任務をあたえるに至つたことを明らかにしている。しかし  
一九一一年に發生した辛亥革命は、これらの革新勢力といわゆる軍  
閥の勢力との妥協によつて行われたものであつたため、革命成功後  
これら二つの勢力の對決を経て軍閥政治の出現をみるることとなり、  
革命の基本的課題とくに獨立と近代化への前提としての強力な統一  
的中央政府の樹立は實現されることなく終つたのである。これに對  
して、第一次世界大戰の勃發にともなう中國民族産業の發展と民族  
意識の昂揚とくに日本に對する強い反感とは、一九一九年五四運動

を發生させ、中國の舊社會舊文化に對する批判を通じて革命の基本的課題を擔いうる新政治勢力の擡頭を促すに至つた。著者によれば、西歐民主主義は軍閥政治の轉覆を前提とするこのような革命運動に對しては全く無力であつた。かくて西歐民主主義にかわつて、レーニン主義による黨組織をとり入れた中國國民黨とコミンテルンの指導下に共產主義社會の實現を究極の目的とする中國共產黨とが新たな革命勢力として登場したのである。國共兩黨は、一九二四年第一次合作を行い、共同して革命の遂行に當つたが、國民黨の連合のなかで次第に革命の指導權を握らうとする共產黨の方針は一九二七年國民黨との分裂を招來することとなつた。

かくて一九二八年、蔣介石は北伐の勝利によつて一應全國的統一に成功し、國民黨一黨獨裁のもとに革命の基本的課題である中國の獨立と近代化との實現に努めた。この努力はかなりの成果をおさめたけれども、そこには一定の限界が存在していた。なぜであらうか。著者は、その理由を、(一)北伐は一部軍閥との妥協によつて行われたため、北伐成功後も全中國に對する完全な軍事的統一と効果的な行政的支配を行えなかつたこと (二)共產黨を完全に根絶しえなかつたこと (三)眞の全國的統一が存在しなかつたため工業及び農業革命に、とくに後者に十分な考慮をほらいえなかつたこと (このことは國民黨が農村の再建の重要性を認めなかつたことを意味するものでもなく、また國民黨の階級的な性格によるものでもない) (四)抗日戰爭の發生が國內建設を不可能にし國民黨をその基盤である都市から追つたこと (五)蔣介石の獨裁的支配は却つてその政治的能力を制約したこと (六)蔣介石は國內建設よりも全國的統一を優先して考

えていたばかりでなく、その權力の基礎が都市にあつたことが農民の經濟的社會的地位の改善に對する希望を利用させえなかつたこと、などにもとめ、これらの諸條件が國民黨内部における腐敗と相俟つて國民とくに知識階級・労働者及び農民の不満を増大させ、共產黨の進出を可能にした、としているのである。

これに對して共產黨は、國民黨との分裂後ソヴェト革命の段階に入ると、コミンテルン及び黨中央の都市工作重點主義に對して毛澤東の指導下に農村工作重點主義にもとづく革命運動を展開した。この革命の基本方針の成功は毛澤東の黨内における指導的地位を確立させ、一九三五年八月抗日民族統一戰線政策の採用を可能にした。著者によれば統一戰線政策は、(一)ソヴェトは日本の侵入に反對しうること (二)蔣の軍事力を共產黨にではなく日本軍に使用させうること (三)中國人民に共產黨を眞の民族主義者として印象づけること (四)全國的宣傳を合法的に行いうること (五)共產黨及び軍の支配を擴大しうること、などの利益をもつものであり、國民黨との統一戰線の結成は、新民主主義論の發表によるインテリ及び中産階級の獲得・整風運動及び穩健な土地改革の展開と相俟つて、共產黨勢力を著るしく發展させるに至つた。かくて共產黨は、「抗日戰爭における發展の機會と戦後における日本軍武器及び滿洲の戰略的基地の獲得(いずれもソヴェトの默認による)に助けられ、一九四五年後の國民黨の軍事的政治的弱點を決定的に利用する」(四二頁) ことによつて、一九四九年國民黨に對する勝利を獲得し、全國的統一に成功したのである。

以上の敘述から知られるように、著者は、國民黨没落の原因をそ

の階級的性格にもとめ、中國共產黨の勝利を中國革命の必然として理解しているのではないように思われる。いいかえれば著者は、北伐後における國民黨の革命の成果を相當高く評價し、抗日戰爭を含む種々の原因が前述した革命の基本的課題に對する解決を困難にし、國民の國民黨に對する不満を増大させ、それが「一九四五—九年の蔣介石にかけていた二つの主要な力、すなわち第一に統一的軍事力、第二に中國農民の大部分と中國インテリゲンチヤの積極的分子の支持（または消極的承認）を利用するように計畫された政治的プログラムをもつていた」（四三頁）中國共產黨に革命の擔い手としての希望をつながせるに至つたとしているように思われるのである。したがつてその勝利は、中國共產黨が強力な統一的國家權力の掌握に成功したことを示すものであるにしても、中國革命の基本的課題とくに國內建設の問題を完全に解決する力をもつていることを意味するものではなく、問題は依然として残されているといわなければならない。それならば、これらの課題は一九四九年以後中國共產黨によつてどのように處理され推進されてきているのであらうか。これがつぎに取りあげられなければならない問題である。

### 三

第二部は、中國共產黨が國家權力を掌握した一九四九年から五四年に至るその政策の發展についての分析に當てられてゐる。著者はまず、一九四九年以後における國內及び對外政策の歴史的根據について考察した後、權力獲得當時における共產黨の主要な任務が、(一)有效な共產黨の支配のもとに新しい國家機構を確立すること、(二)中

國國民を迅速にその完全な支配下におくようにすること、(三)迅速に且つ大戦を避けうる限度で對外的膨脹の可能性を利用すること、(四)都市農村における社會勢力のバランスを變化させ（地主・富農及び都市中産階級を消滅もしくは弱體にすることによつて）、新に上昇した階級（貧農・都市労働者・青年及び婦人）を共產黨の指導と統制のもとにおくこと、(五)財政の要求を充し、インフレーションを終らせ、國家の管理する經濟的發展の基礎をつくり出すような方法で經濟を再建すること（八七頁）、にあつたとされている。したがつて、中國共產黨の活動はこの方向に沿つて展開された。すなわち、一九四九年の中國人民政治協商會議で採擇された基本法によつて連合獨裁と民主集中制にもとづく中央及び地方政治組織——究極的な支配權は共產黨にあり、大衆の組織化・大衆監視機構の樹立などを含めて本質的にソヴェト制度と同質的なものである——を樹立し發展させ、従來の農村工作重點主義から革命の重點を都市に移し都市労働階級を中心とする革命的諸階級の協力の實現に努め、黨員に對する訓練を強化し、労働者・農民・青年・婦人などの組織化に努力し、土地改革を行い、思想改造運動を強行するとともに、既存の農業及び工業生産能力の最高限度まで生産量を増大することに努め、悪性インフレーションの抑制に種々の對策を講じることによつて一九五〇年三月までに物價の安定を實現し、破壊しつくされた經濟の急速な復興を開始させたのである。

これらの政策は、その初期においては不必要な摩擦を避けるという見地から概ね穩健な方法ですめられた。しかるに一九五一—二一年にかけて種々の困難が現れてきた。たとえば、政府資金の不足と

インフレーション再發の脅威、共産黨員に非能率と腐敗の現象が生じてきたこと、大衆説得と社會的壓迫の方法にもかかわらず不満と消極的抵抗の兆候が現れてきたこと、生産の増加も希望もしくは計劃に對して不十分であつたこと、對外的膨脹政策の現れである朝鮮戰爭の損耗によつて中國經濟及び政府財政に對する負擔が非常に増加してきたこと——などがこれであつた。著者によれば、この時期に展開された抗米援朝・反革命鎮壓・愛國公約・増産節約・三五反五反・土地改革などの大衆運動は、いずれもこのような困難な諸現象に對して、「中國民衆に對する中共政權の效果的な政治的社會的權威を増加し、資金を調達しインフレーションを阻止するために」(七三頁)とらあげられたものであつたのである。これらの大衆運動は、中國共産黨を中心に強力に推しすすめられ、相當の成果をおさめたのであるが、その展開過程をつうじて、(一)對外的膨脹と國內建設とは矛盾する (二)急激に政治的社會的權威を絶對化しようとする措置は農工業生産の不斷の増大を妨げる、ということが認識されるようになった。そこで政府は朝鮮戰爭を終熄させて(一貫した對外政策である反米向ソ一邊倒政策を改めたわけではない) 國內經濟建設に全力を傾注するとともに、一九五三年に入ると、(一)農業の協同化に對する壓力の軽減と自作農の土地保有に對する再保證 (二)五反運動で生き残つた中産階級の將來の地位の再保證 (三)五多運動の展開による共産黨員の經濟的任務への集中 (四)特別な資金調達の緩和 (五)經濟的發展及び消費財の供給増加の公約に對する宣傳の強化(八七頁)などを實行したのである。著者によれば、このことは中共政權の權力の衰退を示すものではなく、中央權力の強化は十分に留意さ

れていたのであつて、「一九五三年の壓力の軽減はより大きな努力の集中を確保し次の前進を計劃するためにある戦線で行われた後退戰術であつた」のであり、「その努力の目標は明らかに中國經濟とその工業化の問題」(八七頁)であつたのである。かくて、一九五三年秋のいわゆる「過渡期の總路線」の明確化にもなつて、社會主義への移行の問題が具體的に提起され、五三年にはじまる第一次五カ年計劃は私營企業の國營化・生産合作社の奨励による農業手工業の協同化などを含む社會主義工業化の線に沿つて進められ、基本的にはソヴェト連邦のそれに倣つて行われることとなつた。著者は、現在に至る中共政權の發展をこのように要約しつつ、ソヴェト的體制のもとに強大な國家權力を媒介として社會主義へ進もうとする中共政權のゆき方が、中ソ經濟協力の問題をはじめ政治經濟社會の各方面にわたつてなお數多くの問題を残していることを認めている。第三、四、五部はまさにこの分析に當てられていたのである。

#### 四

第三部は、第二部で明らかにされた中共政權の諸政策及び行動が中國民衆にあたえた影響とその反應とを明確に評價しようとする立場から、中共政權及び革命的階級と考えられている農民・都市労働者・中産階級の實態について、また一般に中共政權と民衆との關係について考察を加えている。

著者はまず、現在の共產主義社會と傳統的な中國社會との關係を明らかにするため、舊中國社會の型及び中國社會のイデオロギーを檢討し、共產主義が思想的にも政治的にも中國にうけいれられるい

くつかの要素をもつていたことを論證している。しかし、著者によればこのことは、共產主義が傳統的中國社會の主要な構成要素と調和するということを意味するものではなく、反對に清末以降の獨立と近代化への要請と相俟つて傳統的中國社會の基礎を破壊しようとするものであり、兩者は本質的には對立的契機を含むものといわなければならぬのである。したがつて問題は、中共政權がその強大な國家權力の壓力のもとに、傳統的中國社會のもつ諸問題を共產主義の方向においてどこまで解決することができるかということである。著者は、これについて、「中共政權の最初の數年の破壞的成果は印象的なものであつたが、一般に考えられているほど多くのことをなしてははいない」(二九頁)と考へるべきであり、「Middle Kingdom」の諸要素が依然として中國社會の將來を決定する力關係において重大な役割を果すであらう」(一二三頁)ことを確信しつ(この部分はフランク・A・キアーマン・ジュニア氏の擔當)、革命推進の中核的存在である中共政權の分析にうつつてゐる。

著者によれば、現在の政權構成の中心をなす共產黨の最高指導部は、約五十名の黨員——究極の權威は毛澤東を中心とする周恩來・劉少奇・朱德・陳雲等にある——によつて構成されており、これらの人々は思想的にも感情的にもまた革命運動の過程においても毛澤東と緊密に結びついており、最高指導部の團結は極めて鞏固であるといわなければならない(著者は、もし分裂の可能性があるとすれば、毛澤東の死後(→)後繼者問題をめぐる對立(→)國內政策とくに協同化の問題を中心とする對農民政策にかんする對立(→)對ソ依存問題をめぐる見解の對立、から生ずると考へている)。しかしこのこと

は中共政權そのものになんの問題も存在していないということに興味するものではない。この點について著者は、(→)中國革命運動において重要な役割を果してきた軍勢力は毛澤東の生存する限り獨立した政治的地位をもつことはありえないが、かれの死後國內政策及び將來の中ソ關係を決定する重要な要素となりうるばかりでなく、黨人勢力(antor, 警察)と對立する可能性があること(→)革命の主導的地位にあつた知識階級(狹義のインテリゲンチヤは全人口の1%)については、中等學校學生を中心とする青年層は共產主義を強く支持しているが、舊文化人は思想改造運動をはじめとする共產黨の政策によつて批判的に、また青年知識層にも支持の程度が減少しつゝあること(→)黨員自身についても、黨の一般方針の具體的問題に對する適用の困難・黨員に對する監視とその不安・アジプロを中心とする活動にかわる技術能率の要求・新舊黨員の對立・黨員の官僚化・農民の從屬的地位に對する舊黨員の不滿、など種々の問題が存在していることを指摘している。

この事情は、政權の階級的基礎とされてゐる農民・都市労働者及び中産階級にも妥當する。すなわち、著者によれば、中共政權は中國の工業化によつて貧困と過剰人口に當面した農業問題を解決しようとしているが、この工業化の成否は結局農業生産の増加に依存する。土地改革は農村社會構造の一部を變革することに成功したけれども、私有的農業制度は依然として中國農村社會の基礎として存在しており、農業の協同化と食糧の計劃的徵集とは農民の生産意欲を失わせ生産の増加を不可能にする。したがつてそれは、中國の工業化に重大な障害をあたえるばかりでなく、このような状態のもとに

おける工業化の強行は農民の福祉を可能な最低限度にまで押し下げ  
るものといわなければならない。かくて農民の不満は増大し、將來  
中共政權の支配力が弱まつた時にそれが重大な役割を果しうる可能  
性のあることを著者は強く指摘している。ついで著者は、革命の指  
導的階級として中華全國總工會に統一的に組織されている都市労働  
者階級にすら、(一)黨の政策による高賃銀の抑制、(二)經濟構造の變化  
と農村人口の流入による間歇的失業の存在、(三)生産増加のための直  
接間接の壓力、(四)學習宣傳などによる休養時間の減少、などの問題  
があり、中産階級にも私營企業としての機能の制限、五反運動によ  
る政府の支配監督の強化に對する不満が存在していることを明らかに  
しているのである。著者は、中共政權の權力的支配機構の存在が  
これらの廣汎な不満を公然たる反抗にまで發展することを不可能に  
していることは、今日のところ否定しえない事實であり、社會主義  
への移行はこのような權力による強行の形をとつて行われていると  
なしている。

かくて著者は、中共政權と民衆との間の關係を判斷する基本的立  
場は、「最高指導部がその支配する民衆に對してどのような態度を  
とつているか及びその支配を實行するために選擇した手段がどのよ  
うなものであるか」というところにおかれるべきであるとし、中共  
政權の支配は「中國市民の大部分に恐怖にみちた無感動さをおた  
え、それが提供しうる利益を蒙らしにしてしまつてゐる」(一七一  
頁)と主張しているのである。

## 五

中ソ關係の在り方が政治・軍事・經濟等あらゆる分野にわたつて  
中華人民共和國の將來を決定する重要な要素であることは、たとえ  
ば現在の中國の對ソ依存關係からみても明らかである。著者は、中  
ソ關係の分析に當てられた第四部において、まず中ソ兩國が共通の  
イデオロギーの基礎に立つて反帝國主義闘争を實踐する同質的な同  
胞國家であり、兩者の間にはいかなる對立的契機も存在しないとい  
う公式的見解を否定し、現在の中ソ關係を決定する要因として、(一)  
中ソ兩國の軍事的依存の性質とその程度、(二)滿洲蒙古新彊における  
中ソの勢力關係、(三)アジアの地域政治の現實とそれに對する中ソ兩  
國の役割、(四)世界政治の實態とアジア共產主義の地位、(五)共產主義  
の教義に對する中ソの役割、(六)經濟的關係、という六つの條件を擧  
げ、現在の中ソ關係の基礎となつてゐる一九五〇年の中ソ友好同盟  
相互援助條約は、敍上の諸要因との關係において、中ソ兩國につき  
の狙いを實現させようとしたものであるとしてゐる。すなわちそれ  
は、中國にとつては、(一)軍事力建設の速度を最大にする、(二)滿洲蒙  
古新彊における中國の力を最大限に強化する、(三)日本及び東北アジ  
アの他の諸國の力を弱體化する、(四)アジアにおける中國共產主義勢  
力を擴大する、(五)反帝國主義感情の指導者としてアジア及びアジア  
共產主義運動においてイデオロギー的政治的優越性を確保する、(六)  
ソ連から最良の貿易條件と最大の資本輸入を獲得する——という目  
的をもつものであり、またソ連にとつても、(一)自由陣營の軍事力を  
ソ連からそらすとともにソ連への軍事依存によつて中共政權に對し  
て優越的地位を保持しうる、(二)滿洲蒙古新彊に影響力を維持する、  
(三)日本に對して警戒し牽制しうる、(四)積極的にアジアにおけるアメ



リカ及び西歐列強の活動を牽制し共產主義の擴大を圖りうる (四) 中ソ間のイデオロギー的統一性を維持しうる——という利益をあたえるものであつたのである。

著者によれば、中ソ關係において、ソ連に對する重大な危険は、「統一された強大な中國が將來のある段階でソ連から獨立することを求めること、とくにアジアを支配するようになること」(二一—頁)であり、現實に中共政權にはソ連と決裂することなく、その軍事的依存を脱却しようとする意圖がある。したがつてソ連は、この危険を避けるために、滿洲蒙古新疆北鮮における有利な地位・中國軍事力のソ連依存・中國の共產主義圈への貿易の依存・重要な青年共產黨員のソ連における教育・中國共產黨へのソ連人の滲透・中共政權のアジア支配を阻止するためアジア共產黨に對する支配の繼續、などの事實と政策とを利用することによつて中共政權をソ連に強く結びつけておくことに努力するものと考えなければならぬ。

かくて著者は、これらの考察をつうじて中ソ關係の見通しについて、(一)中共政權は現在凡ゆる分野で強い對ソ依存關係にあること (二)中ソ條約は共產主義勢力のアジアへの軍事的膨脹の時期に締結されたものであるため軍事的な面が重視されたが現在ではその重要性を減じていること (三)經濟的な面で中ソ貿易及びソ連の經濟援助は中國にとつて不満足なものであり中國は非共產主義圈との貿易の擴大を希望していること (四)過渡期の總路線を採用したことに對してソ連側に反對があること (五)このように短期的には種々の問題があるにしても長期的には中ソ兩國の指導者間に協力的見解が存在すること——を指摘しながら、結局「最も期待しうることでも、それは

中ソ同盟の決定的な破壊ではなく、同盟の強度のわずかな變化にすぎない。初期のチトイイズムの兆候はみられない」(二一六頁)と結論している。しかしこのことは、中ソ關係の分裂への可能性が全く存在しないということではない。著者は、その三つの基本的條件として、中國指導者の内部にソ連に對する激しい不満が生じること・分裂によつて有利な條件で西歐と結合しうるといふ保證があること・ソ連の國內的困難または第三勢力によつてソ連が中國に對して無力化すること、を挙げ、この條件は具體的には、中國におけるソ連の支配が過度に擴大された場合・總路線が失敗した場合・ソヴェト國內に重大な危機が生じた場合・第三次大戦におけるソ連の敗北または重大な後退に際して西歐から有利な條件が示された場合、のような形をとつて現れる、としている。したがつて現在の狀態が繼續するかぎり——とくに毛澤東が生存しているかぎり——、中ソ關係の決裂はほとんど可能性がないと考へるべきであり、中共政權に對する宥和政策は中共を利用することはあつても、それをソヴェト陣營から引きはなすことには役立たない、と結論している。

## 六

最後に著者は結論として、第六部を、最高指導部の幻想・中共政權の戦術目標・ありうべき國內危機の性質・國內的發展の型・自由アジアと中國共產主義の將來・結論の各項に分つて、共產中國に對する將來の見通しを明らかにしている。

著者によれば、中共政權の目標は、第一義的にはスターリン的方

り、それに關連して中ソ同盟を維持し工業化計劃の要求と兩立する範圍内ではアジアにおける中共政權の獨立的權威を増大することである。このような一般的目标にもとづいて中共政權は、當面の戰術的目標として、國內的には、(一)一九五七—一九五九年に工業をソ連の一九二八年の規模にすること (二)獨立性を増した近代の軍隊の建設 (三)農業生産及び分配に對する (一九五七年までに少くとも農民の二〇%を生産合作社に組織することを含む) 國家統制の強化 (四)農業生産増大への努力と軍事及び重工業への優先的投資 (五)技術家の訓練

(六)中央集權の支配を維持するための官僚制度の強化 (七)教育の普及と共產主義教育の強化を、また對外的には、(一)國內建設を阻害しない最大限度でのアジアへの膨脹、少くとも後にアジアで指導的地位を主張しうる政治的イデオロギーの基礎の維持 (二)中ソ同盟のもつ安全の保障と經濟的利益を害わない範圍でのソ連に對する最大の行動の自由の獲得、を掲げているのである。しかし概括的にいえば、一九五二年の中國は工業的には一八九〇年代のロシアに近く、第一次五カ年計劃の對外貿易依存度及び軍事力建設の比重はソ連の場合より高く、しかも人口の増加とその都市化という重大な問題に直面している。著者によれば、これらの問題の解決は結局農業生産量の増加に依存する(中國の社會主義建設はソ連より困難と考えられている)。したがつて、これに關係ある五つの要因すなわち (一)自然死亡率の急激な減少 (二)都市人口の不均衡な増加 (三)農業生産高の停止または減少——農業政策に對する農民の反動として—— (四)工業投資に比較しての農業投資の輕視 (五)數年にわたる不作の繼續——が發生した場合、とくに一九五二年の農業生産高より一〇%の減少

が數年にわたつてつづけられた場合には(農業の協同化と計劃的徵集とはその可能性を大きくしているのであるが)「決定的な危機」が生ずる可能性があり、それは單に國內的な問題にとどまらず、ソヴェト的革命方式が中國に不適當であつたことを示すものであつて、指導部は分裂し中共政權の革命方式はアジア各國によつて再檢討されるようになるであろうことを著者は強く指摘している。

それならば新中國はどのような形で國內的に變化していくのであるか。著者はこれを (一)最高指導部 (二)官僚 (三)人民の三つに分けて説明しているが、まず (一)については、現在の指導部は一九六〇年代までは毛澤東が死ぬと否とに拘らず統一を保持するであろうが、次の世代は現在四十歳代の人々——安子文・頼若愚のような——によつて擔われソ連のように engineers, industrial managers, planners によつて構成されるようになると思はれること (二)については、ソ連的官僚勢力が發達し現在相當程度の行政權力を有する軍勢力と對立する可能性があり、黨は依然中心的存在としてとどまるにしてもその機能は狭められていくこと (三)については、(一)共產主義的知識人が増加し人民が都市化する傾向がでてくること (二)家族は中共政權の壓迫の最後の退避所として社會的重要性をもつようになること (三)福祉に對する人民の要求は軍事及び工業化のために消費水準の引下げがつづけられるかぎり強化されること (四)人民は權力者の特權的地位を認識し兩者の溝は深まってくる一方、政權は民族主義の鼓吹によつてその溝を埋めるように努力すると考えられること、を指摘したうえ、現在人民の間には全體主義國家に共通するものとして (一)農業の協同化と計劃的徵集に對する農民の不滿

(四)勞働者の低い福祉水準と勞働強化に對する嫌惡 (四)累積する逃れ難い壓迫と脅威に對する嫌惡、が存在していることを明らかにしている。また對外的な問題としては、著者は、中共政權の將來が自由アジアの動向によつて重大な影響をうけるものであり、大戰回避の前提のもとに行われる中共のアジア膨脹の意圖に對して自由アジアがその當面する政治的經濟的軍事的諸問題の解決に成功すれば、それは中共の革命方式の優越的地位を却け、その根本的再評價を招き、中共政權の將來を決定することになるであらう、としているのである。

これを要するに、現在中共政權は、中國に内在する數多くの不満にもかかわらず、その鞏固な統一と支配機構の存在によつて安定している。しかしその將來の安定は、前述したように、(一)ソ連の行動と政策 (二)自由アジアとの關係 (三)經濟建設の成果 (四)指導部の統一、という四つの條件にかかっていると考へなければならぬ。これが、第三次大戰が起らないという前提のもとにおける著者の結論であり、第三次大戰の發生の可能性は「自由世界の力と統一と意志」にかかっているというのがまた著者の基本的態度である。

以上が第五部を除く本書の概要である。筆者がこのように詳細に本書の内容を紹介した所以は、この書物がアメリカの學界における新中國に對する有力な見解を代表するものであるばかりでなく、新中國研究の現在の水準を示したものと考へられるからにほかならない。もちろん著者の見解には問題としなければならぬ點も數多く存在するが、すでに豫定の枚數を著るしく超過しいちいちこれを取

り上げている餘裕がないので、總括的な感想を述べてこの紹介を終らうと思う。

すでにみたように、本書は中華人民共和國の將來を豫測することに視點を置いて新中國の現状を分析している。したがつてその取扱つている分野も本書の分量の割には廣汎であるばかりでなく、極めて大膽に「戰略的判斷」とも考へられるべき結論を導き出している。このなかには參考となる意見も少くないが、同時にその當然の結果として、著者の見解を裏づける資料はすべてにわたつて決して十分に示されているとはいわれぬ。筆者としてはこの點について今後の展開を期待したい。また本書を一貫して感じられることは、問題をとり扱う場合にいわゆるアメリカ人的見方が非常によく見出されるということである。たとえば本書の一つの問題點である現在の中共政權と人民との關係についても、たんに權力的支配に對する反抗という形でこの問題を一般的に理解しうるかどうかは疑問である。すなわち、西歐的感覚もしくは西歐的生活水準を離れて、過去における最惡の生活環境と歴史的條件とを變革した中國人の中共政權に對する意識を中國人の立場に立つて捉へなければ、將來はともかく現在この問題を正しく理解することはできないように思われるのである。このような問題はあるにしても、このことはアメリカにおける新中國研究の代表的業績としての本書のもつ價值を害うものでないことはいふまでもない。

(石川忠雄)